

法事はなんのため？ だれのため？

●目次●

1 法事のさまざま……1

2 あなたの思いを、今は亡き、あの方へ……9

3 「法事をつとめよう」 そう思ったら……17

1 法事のさまごま

◎追善供養と回向

「法事」と聞くと多くの方は、○回忌という年回法要を思い出されることでしょう。「法」には仏さまの教え、「事」には物事を行うの意味がありますから、本来は仏さまの教えを実践することゝが法事であり、その意味では年回法要に限らず、毎日仏さまにお茶湯やご飯を供えたり、お勤め（読経）をしたりすることも、全て法事なのです。仏さまを敬う心や行い、また仏前に物品を捧げることが供養ともいい、亡き人のために供養することを追善供養、追善回向といえます。

追善とは、私たちが亡き人のために善い行い（善根功德）を積むことで、極楽浄土にいらつしやる亡き人が早くさとりを開き、私たちを見守り、導いてくださることを願ってその功德をめぐらし向けることを回向といいます。回向は自分が積んだ功德を自分のためだけでなく、他の人に振り向けること、正確にいえば、阿弥陀さまにお願いして、亡き人のもとに届けていただくことで、全ての人が

極樂に生まれて、ともにさとりへの道を歩むことを願うという、大きな慈悲の心をあらわす行為なのです。もちろん浄土宗の教えでは、心をこめて「南無阿弥陀^{なむあみだ}仏」とお念仏をとなえることが最高の功德であり、追善供養です。

法然上人は「亡き人のためにお念仏をとなえれば、阿弥陀さまが亡き人をみ光で照らしてください、極樂浄土でのさとりへの歩みをますます進めてくださる」とおっしゃっており、ご自身も後白河法皇の十三回忌をお勤めになりました。追善のお念仏を勤めれば勤めるほど、阿弥陀さまは亡き人をさとりへと進めてくださり、私たちが亡き人に導いていただける日も近づいてくるのです。

◎年回法要

法要とは法の要^{かなめ}、つまり仏教の肝要な部分という意味ですが、一般には読経などの仏教儀式を法要といいます。年回の法事は一周忌、三回忌、七回忌……と、数年の間隔をあけてめぐってきます。

■節目の追善供養

「去るものは日々に疎^{うと}し」という言葉があります。身近な人が亡くなると、は

はじめは誰もが毎日心を込めたご供養を心がけます。しかし日常の雑事に追われ、日が経つにしたがつて、だんだんとその気持ちは薄れてくるものです。そこでお葬式の後、初七日から満中陰まんちゅういん（四十九日しじゅうくにち）までは七日ごとに中陰のご供養をし、満中陰からおよそ五十日後には百カ日、亡くなって一年が経つと一周忌、その後も数年ごとに年回の法要を勤めます。このようにご供養の節目は、はじめのうちは頻繁に、年月が経つにつれて徐々に間隔をおいてめぐってきます。いちばん大切なことはもちろん毎日のご供養ですが、年回などの節目には、とくに心を新たにして追善の思いを捧げることを心掛けたいものです。年回法要をご縁に、普段疎遠になってゐる方たちとお会いできるのも亡き人のお導きなのです。

■ 命日と祥月

仏教では亡くなった日のことを命日めいにちといいます。いわば極楽浄土に生まれた誕生日で、毎年めぐってくる命日を祥月命日しょうつきといいます。「祥月」は中国で十三カ月目の命日を小祥忌しょうしょうき、二十五カ月目の命日を大祥忌だいしょうきと呼ぶことに由来しています。

■ 年回法要

亡くなった後、七日ごとに勤める中陰や百カ日、そして年回などの法要は室町

時代、『地蔵菩薩十王經』に説かれる十三仏信仰により広まったとされます。亡

くなって一年目が一周忌、それ以降は三と七のつく年が年回にあたりますが、三と七の年を年回とするのは、そのお経に説かれている「三魂七魄」という教えに由来しているとの説があります。三魂七魄は怪談話などで言われる「魂魄この世に留まり」の魂魄、つまりいずれも靈魂のもとになった言葉です。魂には三つの存在、魄には七つの存在があるとされることから、靈魂供養のために三と七の年を定めたというのですが、真偽のほどは不明です。十三仏信仰は浄土宗の教えではありませんが、年回などの追善法要はこのかたちによって勤めています。

仏事では数え年を用いるため、二年目が三回忌、六年目が七回忌、以後同様に十三、十七、二十三、二十七、三十三回忌と続きます。また、古くから日本では、三十三回忌または五十回忌が済むと「亡くなった人はご先祖さまになる」と信じられてきたことから、五十回忌の後は五十年ごとに報恩感謝の法事を行います。

◎お墓について

遺骨は適宜の日を選んでお墓へ埋葬します。仏教の墓石はお釈迦さまのご遺骨